

第10部会

考察する。

では、社会科学にもとづいた仏教社会福祉において、仏教と社会福祉との関係性はどのように扱われるのだろうか。中垣氏は、仏教と社会福祉の結合様式は、具体的で実践的な活動体としての仏教教団を媒介とする限りにおいて、歴史的・社会的現実のもとで結び付けられるとする。また、「仏教的価値志向性（仏教精神）」は、（中垣氏が述べるような）仏教社会福祉研究に関する理論的枠組みを根底に据えて、社会的問題への対応に積極的に取り組み、問題解決の実践過程の上に、主体的契機として導入・活用していくべきであることを述べている。

しかし、仏教教義を主体的契機とした場合に、主体者を即社会的な活動に結びつかせたり、また人間関係において近代的な意味での平等観を生じさせるのかどうかは、さらに検討が必要に思われる。しかし、この点を理論化しなければ仏教社会福祉の存在の意義が問われることになりかねないだろう。同時に、仏教思想を抜きで仏教社会福祉論を構築することは、やはりその独自性と役割を指し示すことができないだろう。

最後に、社会科学を強調した仏教社会福祉論においては、以下の課題が生じることを指摘して終わりたい。

一、社会科学を強調する仏教社会福祉論では、仏教教義との無関係さが社会科学の強調と相対的に現れる。

二、その結果、社会福祉思想に合致したかたちで、随意的に仏教思想が選択され結合される可能性、あるいはまったく仏教教義と無関係に成り立つ場合もありうる。

仏教思想に基づくケア論の展開

坂井祐円

近代社会は、独立した個人が、権利や義務に関わる社会的規範に反しない限りで、それぞれの自由意思や判断能力に従って生きる、という個人主義的自由主義をもたらしたが、ケア論はその反動から起こってきたものである。すなわち、人間とは、そもそも共同性のもとに生まれ育ち、他者への配慮や同情・共感に由来する行動規範のもとで、他者との感情的なつながりを求める存在である。人と人が相互に支え合い、共に生きる世界を理想とする関係主義的共生主義が、ケア論の基調には流れている。

ケア論が前提とする無自覚な信念は、素朴な人間肯定・人間信頼にあると言えよう。仏教思想が現代のケア論に寄与できる面があるとすれば、この素朴な人間観に対して反省を促すとともに、「ケアする主体はいかにあるべきか」についての一つの問題提起を投げかけることではないかと思う。それはまた、近代社会が生み出した理性中心の人間観とも異なる、智慧と慈悲に基づく人間観の提示である。

そこで問題としたのは、ケア論の焦点の一つである「ケアへの欲求」についてである。多くのケア論に散見されるのは、「ケアへの欲求」は人間にとって本質的で自然な善なる感情である、という主張である。赤子が泣いていた、人が困って途

方に暮れているのを見れば、手を差し伸べたいと思うのが人間の自然な有り様であろう。しかし、こうしたヘケアへの欲求は、表面上は「他者のために」起こしているように見えて、内実は「自己の存在意味を確認するために」起こしているのである。人がケアする行為を通して喜びや充足感を味わうということが、このことを端的に証明している。

一方、人はケアする行為を通して、むしろ疲弊や虚無感に陥ることもあれば、無意識に相手を支配しようしたり、相手に強く依存してしまう場合もある。ケアに伴うこれらの機能不全は、他者との関係性に起因するだけでなく、根源的にはヘケアへの欲求それ自体に由来していると言えないだろうか。

仏教思想の中でも、とりわけ唯識思想では心の深層に根付いた我執について究明している。これは「俱生の我執」と呼ばれ、意識的表層的な我執（「分別の我執」とは区別される。「俱生の我執」は、末那識（＝深層の自己意識）に付随して起こるのであるが、つまりは、自己保存の欲求であり、自己の存在意味に関わる我執である。すると、ヘケアへの欲求とは、普通には善なる性質のようにも見えるが、仏教思想に照らしてみれば「俱生の我執」に抵触する由々しき問題ということになる。

唯識思想によれば、「俱生の我執」を超越することによって、末那識が転換して平等性智となり（転識得智）、これに相應して如来の大慈悲心が顕現するという。大乘仏教の伝統では、慈悲に衆生縁・法縁・無縁の三種が挙げられるが、ここにおいて顕現する大慈悲心とは、「無縁の慈悲」を指している。衆生縁の慈悲とは衆生的情感に合わせて為される慈悲のことであり、

法縁の慈悲とは仏法に照らしつつ為される慈悲のことである。これに比して、「無縁の慈悲」とは、字義通りには「対象の無い慈悲」という意味であり、他の二つとは質的に大きく異なっている。『大智度論』には「無縁の悲は畢竟空より生ずる」（大正二五・四四二上）とあり、「無縁の慈悲」とは、人間が起こすのではなく、空性において起こる慈悲であることが示されている。慈悲心を広くヘケアへの欲求と理解するならば、「私があなただけをケアする」という我執のケアから、「私もあなたも共に空性においてケアされている」という我執を翻したケアへの転換が求められよう。ここに仏教思想が提起する「ケアする主体」の意義を見出すことができるのである。

大正期の仏教教化をめぐる

熊 本 英 人

日露戦争以後、大正デモクラシーを経て、帝国主義を以て戦争へと向かう昭和初期まで、この時代の流れに即して、仏教が社会的にどのような使命感を持ち、どのような影響を及ぼしたかを見る手がかりとして、この時代の布教教化について考える。

まず、布教教化の内容的な面からみると、その背景には、国による国民教化策としての宗教の位置付けがある。

一例として、曹洞宗の『宗教時報』から、布教教化に関する